


「見えない」から「わかる」へ 視覚障害の世界変える機器、来年発売

有料記事

福家司 2025年2月20日 10時00分



新製品「SYNCREO」を手にする代表取締役CEOの中村猛さん=2025年1月29日午後4時50分、高松市紺屋町、福家司撮影 



視覚障害のある人が、眼鏡のようなデバイス（機器）を装着するだけで、つえや点字ブロックに頼らず安全に外出できる。そんな画期的な製品が来年販売される。開発したのは高松市のベンチャー企業だ。

「Raise the Flag.」は、薬草関連の事業を手がけようとしていた中村猛さん(52)が「視覚障害の世界を変える！」を理念に2017年、起業した。当事者の声を聞きながら多様な製品を開発してきた。

たとえば20年に発売した「みずいろクリップ」。コーヒーカップなどの容器に挟み、決めた水位まで液体が注がれると、音で教えてくれる。対象物に押し当てると、その色も知らせてくれる。

開発のきっかけは「コーヒーを飲むとき、こぼれないようカップに指を入れて量を測っているのに、手をやけどする」という声だった。判別できる色は当初の14色から22色まで増えた。

創業時から主力商品にすることを目指して取り組んできたのが、全盲の人でも感覚的に環境認識できるデバイスの開発だ。

自動運転車の技術をコンパクトに

形はVRゴーグルに似ている。装着すると、視線の先にある壁などの存在や大きさ、距離などを音響と振動で感覚的に伝えてくれる。

単純なようにみえて、仕組みは大がかりだ。

距離計測には、自動運転車などで使われている「ステレオカメラ」を活用。超音波センサーや赤外線も駆使する。

「大容量の電源が供給可能な車と違い、人が身につけられるサイズでの低消費電力のシステム開発が難しかった」と中村さんは振り返る。

発展めざましい生成AIも搭載する。「将来的に『歩道がどこまで伸びているか』など知りたいことや困ったことを正確に教えてくれるようになれば、ガイドヘルパーがついているのと同じになります」。

生成AIは距離情報の処理にも使われるという。

昨年完成した実験機に、「SYNCREO(シンクレオ)」と名付けた。「視覚障害者の『視(み)えない』を『わかる』にシフトし、行動の範囲を広げることができる」と手応えを感じた。

今年、試験販売・配布して、来年の製品発売に向けた機能改善を図る。

中村さんが起業を決めたのは、テレビで「見えないことは不便だけで、不幸ではない」という若い全盲の女性の言葉を聞いたことがきっかけ。「『あの女の子が困るコトのない未来を必ず創る』」とノートに走り書きしたのが原点だ。

発売予定の製品「SYNCREO」は1台50万円以上を予定している。

まだ性能には課題もあるが、「将来、精度が高まれば、点字ブロックや音響式信号などのコストも不要になり、社会が変わるかもしれない」と夢を描いている。

Rise the Flag.のプロフィール

視覚障害による不便を解消する製品・サービスの開発を目指して高松市に創業。資本金6200万円。中村猛さんが代表取締役CEO、エンジニアの篠原真和さん(40)が取締役CTOを務める。2024年、パソナグループのビジネスコンテスト・からだ部門で最優秀賞を受賞。エンジニアを募集している。

朝日新聞のデジタル版に掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.